



江戸勉強会東海道神奈川編

平成25年7月28日

東藝術俱樂部



贈従三位左兵衛佐源朝臣
新田義興公

キリトリ

由緒

昔、日本中で戦いが続いていた「室町時代」。
新田義興公（にっただよしおきこう）という、とても強くて勇敢な武将がいました。
義興公は新田義貞公（にっただよしさだこう）の次男として生まれ子供のころの名前を徳寿丸
としました。青年になった徳寿丸の勇敢な姿を見た後醍醐天皇が武士の位と義興という
新しい名前を授けて下さいました。

その頃日本は国が南と北に別れ、争いを繰り返していました。義興公は天皇を守るために
戦いました。そして、勇気と知恵でどんな大軍にも打ち勝ったので、武将として有名に
なりました。大勢の敵が襲ってきても義興公が負けることはありませんでした。

敵の武士たちは、義興公のことが怖くてたまりませんでした。そこでいくさでは義興公に
勝てないので卑怯な作戦を立てました。敵の竹次と江戸という武士が、味方の振りをして
義興公に鎌倉で戦うことを進めました。それを信じた義興公は鎌倉へ行くために多摩川の
矢口の渡というところから船に乗りました。ところが義興公の乗った船は敵に襲われて
沈んでしまったのです。（一三五八年十月十日）

義興公が敵に騙されて死んでしまった矢口では、不思議なことが起こりはじめました。
夜になると、ぼうつと怪しい光が現れるようになり雷がたびたび落ちるようになりました。
それから、もつと不思議なことに、義興公を裏切った人は次々と義興公の怨霊に悩まされ
狂死しました。それを見た村人たちは義興公の祟りを鎮めるために、義興公の墳墓の前に
神社を作ることにしました。

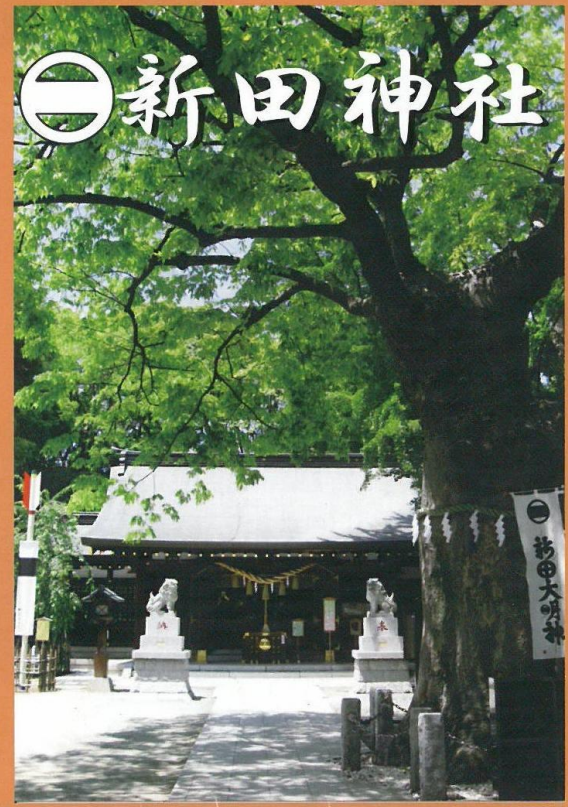
こうして村人たちは新田神社を作り、義興公を「新田大明神」としてあがめたのです。
やがて義興公は、村人や旅人の「運を聞き守り、幸せに導く霊験あらたかな神様」
として人々から広く崇敬されるようになりました。

義興公の物語は江戸時代には平賀源内によって歌舞伎・浄瑠璃
「神霊矢口渡」というお芝居にもなり、その壮絶な生涯は、
今も語り継がれています。



『破魔矢』 癸祥の地

新田神社





樹齡750年の櫨の御神木前にて
(ここで、キリロラ☆顧問の素晴らしい歌が披露
されました。超感動です!!)



新田神社の由緒と矢口の渡しのお勉強です

歌舞伎「神霊矢口渡」



初代歌川国貞画 天保14年～弘化4年頃(1843-47)
大田区立郷土博物館蔵



「役者見立東海道五十三駅」三代歌川豊国画 嘉永5(1852)年
国立国会図書館蔵

人形浄瑠璃。時代物。5段。通称《矢口渡》。福内鬼外(平賀源内)作、吉田冠子(3世吉田文三郎)・玉泉堂・吉田二一補助。1770年(明和7)1月江戸外記座初演。新田義興が武州矢口渡で横死し、その霊が雷電となったという新田明神の縁起を《太平記》をもとに脚色、鬼外の代表作であり江戸浄瑠璃の名作である。新田義興の死後、その遺臣由良兵庫之助と義興の弟義峰、それに思いをよせる矢口の渡し守の娘お舟と父頼兵衛の活動が中心で、歌舞伎では、94年(寛政6)8月桐座が初演。

相模国と武蔵国の国境、六郷川の川下「矢口の渡し」のほとりに一軒の家がたっている。この家の主、頼兵衛は金欲しさから先の戦で足利方に味方し、新田義貞の嫡男・義興をだまして、舟をしずめ殺害した極悪非道な人間である。ここへ義興の弟・新田義峰が妻の傾城うてなを伴って人目を忍んでおちのびてくる。うてなが癪をおこしたので、二人は傍らの家に一夜の宿を頼む。頼兵衛の一人娘・お舟ははじめのうち宿を断るが、義峰に一目惚れしてしまい泊めることを承知する。連れは妹だと聞いたお舟は、義峰に恋心をうちあげかき口説く。義峰は兄・義興の最後の様子を聞きだしたいがために、お舟を抱く。ところが不思議な力によって二人は気を失いその場に倒れる。うてなはこれを見て、すぐに夫の所持する新田家の白旗のたたりだと気がつき、旗を掲げて拝むと二人は息を吹き返す。これを見ていたのが頼兵衛の下男・六蔵。お尋ね者の義峰と気づいた六蔵はすぐにも奥の部屋へ踏み込もうとするのをお舟はなだめすかす。六蔵が自分に気があるのを知っていたお舟は、自分も六蔵にほれているように偽って、ひとまず頼兵衛を迎えに行かせる。お舟は思い悩んだ末に、奥の部屋へと入っていく。竹やぶをかきわけてお舟の父親・頼兵衛が姿を現す。鍵のかかった我家へ裏から押し入り、暗闇の中を奥の一間にいる二人を殺そうと忍んでいく。床下から刀で突きさしてみると、声をあげて苦しんでいるのはなんと娘のお舟だった。瀕死のお舟は頼兵衛に、非道なことはやめて改心してくれるように頼み、好きになった義峰から「兄を殺した頼兵衛とひとつでないことを証明すれば未来は一緒になろう」といわれたことを話す。だが怒った頼兵衛はせせら笑い、たちふさがるお舟を情け容赦なく突き飛ばし、義峰たちを追って走り去る。お舟は合図の太鼓を打てば困みが解かれることを思い出し、止めようとする六蔵を刺し殺し、最後の力を振り絞って太鼓をたたく。一方海へこぎ出した頼兵衛は、天から飛んで来た新田家伝来の矢に、首を射抜かれて息絶える。



矢口の渡し碑(川崎側)



矢口の渡し跡解説版(東京側)



矢口の渡しあるいは古市場の渡しは古代の東海道や鎌倉街道下ノ道の渡し場と云われ古くからの渡し場であった。中世の頃の矢口の渡しは新田神社の西側、矢口西小学校付近にあったと考えられている。矢口の渡し跡付近になったのは江戸中期の頃と云われている。この渡しは昭和24年まで続いていた。



多摩川の矢口の渡し場で楽しくお勉強です。

鈴が森刑場(跡)



鈴ヶ森刑場(すずがもりけいじょう)は、東京都品川区南大井にかつて存在した刑場。江戸時代には、江戸の北の入口(日光街道)に設置されていた小塚原刑場、西の入口(甲州街道)沿いに設置されていた八王子市の大和田刑場(または中仙道の入口の板橋刑場とする説もある)とともに、江戸3大刑場といわれた。

元々この付近は海岸線の近くにあった1本の老松にちなんで「一本松」と呼ばれていたが、この近くにある鈴ヶ森八幡(現磐井神社)の社に鈴石(振ったりすると音がする酸化鉄の一種)があったため、いつの頃からか「鈴ヶ森」と呼ばれるようになったという。

1651年(慶安4年)開設される。1695年(元禄8年)測量された検地では、間口40間(74メートル)、奥行9間(16.2メートル)、であったという。1871年(明治4年)閉鎖される。220年の間に10万人から20万人もの罪人が処刑されたとされているが、はっきりした記録は残されていない。当時は東京湾沿いにあり、刑場近くの海で水磔による処刑も行われたとの記録も残されている。

当時の東海道沿いの、江戸の入り口とも言える場所にあるが、刑場設置当時浪人が増加し、それにともない浪人による犯罪件数も急増していたことから、江戸に入る人たち、とくに浪人たちに警告を与える意味でこの場所に設置したのだと考えられている。

最初の処刑者は江戸時代の反乱事件慶安の変の首謀者のひとり丸橋忠弥であるとされている。反乱は密告によって未然に防がれ、忠弥は町奉行によって寝込みを襲われた際に死んだが、改めて磔刑にされた。その後も、平井権八や天一坊、八百屋お七、白木屋お駒(白子屋お熊)といった人物がここで処刑された。

現在は、東海道を継承している第一京浜(国道15号)の傍らにあり、隣接する大経寺の境内となっている。刑場跡は自由に見学できる。

当時の広さはないが、現在も井戸や、火灸用の鉄柱や磔用の木柱を立てた礎石などが残されている。なお、礎石の位置はかつてあった場所から移動され、供花台も設置されて、一種の供養碑の役割も果たしている。

ここで、歌舞伎の「鈴が森」の名場面を即興で演じて貰いました！ 内容は次頁へ

「浮世柄比翼稲妻」(うきよづかひよくのいなずま) の「鈴ヶ森」



初代歌川国貞画



「役者見立東海道五十三駅」三代歌川豊国画 嘉永5(1852)年 国立国会図書館像

作・四世鶴屋南北。文政6年(1823年)3月、中村座初演。歌舞伎では古くから劇化されてきた不破伴左衛門と名護屋山三との確執の物語(直接の材料は山東京伝「昔話稲妻表紙」)に、白井権八・三浦屋小紫・幡随院長兵衛の世界をないまぜにした作品である。現在では、絢爛たる吉原仲之町を舞台に不破と名護屋が火花を散らす「鞆当」の場面と、逃亡中の白井権八が幡随院長兵衛と出会う「鈴ヶ森」のくだりが独立上演されることが多い。

ここは東海道、刑場のある鈴ヶ森の海岸。雲助たちが大勢たむろしている。そこへ通りかかった飛脚を大勢で取り囲み身ぐるみはぐ。その飛脚が持っていたのは、白井権八という若者の手配書だった。国で人を殺したという権八をとらえれば、褒美の金がもらえるだろうと皆勇み立つ。その後へー丁の駕籠がやってきて、やさしげな若者をおろし、脅して法外な金をむしり取ろうとする。雲助たちは丸に井の字の紋を見てこの若者こそ手配書の白井権八だと気づき襲いかかる。若者は仕方なく刀を抜くが、滅法強くて雲助たちは次々に手足を失い命を落とす。そうしているうちにもう一丁駕籠が通りかかるが、この騒ぎを見て駕籠かきたちは駕籠を放りだし逃げてしまう。権八がその提灯の明かりで刀の刃こぼれを確かめていると、駕籠のたれが跳ね上がる。その場を立ち去ろうとする権八へ、駕籠の中から声が掛かる。駕籠から出てきたのは、幡随長兵衛という名高い親分。廻状を読みくわしくは語らないが権八が困っているのを見てとった長兵衛は自分のところへ来ないかと誘う。喜んだ権八は江戸での再会を約束する。

幡随院長兵衛

「お若えの、お待ちなせえやし」

白井権八

「待てとお止めなされしは、拙者がことござるかな」

幡随院長兵衛

「お若え方の御手のうち、あまり見事と感心いたし、思わず見とれておりやした」

白井権八

「雉も鳴かずば討たれまいに、益なき殺生いたしてござる…」

名せりふです

八百屋お七



吉祥寺 お七・吉三の比翼塚



豊原国周画



歌川広重画

八百屋お七(やおやおしち、寛文8年<1668年>? - 旧暦 天和3年3月28日<西暦1683年4月24日>、生年・命日に関して諸説ある)は、江戸時代前期、江戸本郷の八百屋の娘で、恋人に会いたい一心で放火事件を起こし火刑に処せられたとされる少女である。井原西鶴の『好色五人女』に取り上げられたことで広く知られるようになり、文学や歌舞伎、文楽など様々な文芸・演芸において多様な趣向の凝らされた諸作品の主人公になっている。

お七の生涯については伝記・作品によって諸説あるが、比較的信憑性が高いとされる『天和笑委集』によるとお七の家は天和2年12月28日(1683年1月25日)の大火(天和の大火)で焼け出され、お七は親とともに正仙院に避難した。寺での避難生活のなかでお七は、寺の小姓生田庄之介と恋仲になる。やがて店が建て直され、お七一家は寺を引き払ったが、お七の庄之介への想いは募るばかり。そこでもう一度自宅が燃えれば、また庄之介がいる寺で暮らすことができると考え、庄之介に会いたい一心で自宅に放火した。火はすぐに消し止められ小火(ぼや)にとどまったが、お七は放火の罪で捕縛されて、鈴ヶ森刑場で火あぶりに処された。

お七の恋人の名は、井原西鶴の『好色五人女』や西鶴を参考にした作品では吉三郎とするものが多く、そのほかには山田左兵衛、落語などでは吉三(きっさ、きちざ)などさまざまである。

天一坊改行



豊原国周画

山伏の天一坊改行は、江戸時代中期、将軍・徳川吉宗の落胤を称して浪人を集めていたが、捕らえられ獄門になった。

大岡忠相の裁判を集めた講談『大岡政談』に収められ、「天一坊物」として歌舞伎、映画、小説の題材になったが、実際には大岡は本件に関係していない。



豊原国周画

享保13年(1728年)夏、浪人・本多儀左衛門が関東郡代・伊奈忠達の家敷を訪ね、南品川宿の山伏常楽院方に将軍の血筋で源氏天一坊なる人物がいて近々大名にお取り立てになると称し、浪人を大勢召抱えて役儀などを与えているとの問い合わせがあった。

伊奈は不審なことであるとして、常楽院の名主、地主を呼びつけて尋問した。取り調べの結果、常楽院方で浪人を集めているのは改行という山伏で、紀州生まれで将軍・吉宗の落胤を称していることが解った。伊奈は上司(勘定奉行)に報告して、指図を仰いだ。報告は老中を通じて吉宗に伝えられた。吉宗はこれに対して、どうやら「覚えがある」と言ったようである。吉宗は身体強健でその上に剛毅な人柄であり、紀州時代に女性関係が多々あったとしても不思議はない。御落胤の話が本当である可能性があったため、関東郡代ではすぐに天一坊を捕らえることはせず、時間をかけて慎重に調べた。半年以上たった翌享保14年(1729年)3月、伊奈は天一坊と常楽院(天一坊の家老と称して赤川大膳を名乗っている)その他の関係者を郡代屋敷へ呼びつけ詮議した。天一坊の口上によれば、天一坊は元禄12年(1699年)、紀州田辺の生まれで、母が城へ奉公へ出て妊娠したので実家へ帰されて産まれたという。その後、母とともに江戸へ出て、母は町人と縁づいた。母は由緒書などを持っていたがこれは焼失してしまったが、母から「吉」の字を大切にせよと言いつけ聞かされていたという。14歳のとき母が死に、出家して山伏となり改行を名乗った。死んだ伯父から「公儀からおたずねがあるであろう」と言われた。これらのことから、自分の素性が高いものであり、紀州の生まれであって「吉」のことも考え合わせて、自分は公方様の御落胤であり、近々大名に取り立てられると考え、浪人たちの来るにまかせた次第であるということだった。

常楽院や浪人たちを取り調べたところ、天一坊は彼らに、「自分は公方様にお目通りして、お腰物を拝領した。公儀から扶持を賜ったが、遊女町で暴れたために停止になってしまった。そのため、上野の宮様におとりなしを頼んでいる。上野で公儀の法事があったので参詣し銀30枚を香典として差し上げた」などと語っていたことが解った。もちろん、これらのことは真っ赤な偽りであった。天一坊は浪人を常楽院方に集めて大名に取り立ての際は、おののけに役職を与えると約束していた。天一坊は公方様の御落胤を騙り、みだりに浪人を集めたとして捕らえられ、4月に勘定奉行稲生正武(下野守)から判決申し渡りがあり、4月21日に死罪の上、品川で獄門となった。天一坊のもとに集まっていた常楽院や浪人たちも遠島や江戸払いとなり、名主や地主も罰を受けた。検挙の端緒をつくった浪人本多儀左衛門には銀5枚の褒美があった。

丸橋忠弥



豊原国周画

『樟紀流花見幕張』(くすのきりゅうはなみのまくはり)は、は歌舞伎の演目。通称に「慶安太平記」(けいあんたいへいき)、「丸橋忠弥」(まるばしちゅうや)。二代目河竹新七作、全六幕。明治3年3月(1870年4月)東京守田座で初演。

由井正雪による幕府転覆未遂事件・慶安の変を題材とする。現在では主に丸橋忠弥のくだりのみが上演される。

楠木正成の末裔と名乗る由井正雪は同志を集め幕府転覆を図る。

同志の一人丸橋忠弥は、江戸城攻撃に備え堀の深さを測量すべく泥酔した中間に変装するが、来かかった老中松平伊豆守に見咎められる(江戸城掘端の場)。

忠弥は謀反を隠すため、わざと酒浸りの日々を送っている。そうとも知らない舅の弓師藤九郎は、借金の返済と妻お節の離縁を迫る。困った忠弥は舅に真相を話し納得させようとしたが、かえって驚愕した藤九郎に訴人される。大勢の捕りに囲まれた忠弥は抵抗空しく捕縛される(忠弥内捕物の場)。



◆庭園付き離れ座敷



懇親昼食会は、安政3(1856)年創業のそば会席「吉田家」で行いました。

懇談中、窓を開けるとそこには江戸東海道が続いているのではないかという感覚になりました。

池田顧問・キリロラ☆顧問のお話を聞きつつ、美味しいそば会席を戴きながらの楽しく和気あいあいとした懇親会でした。

江戸の浮世絵も直接触って勉強しました。

品川宿は江戸八百八町の表玄関で東海道五十三次の振り出しであり、諸大名も参勤交代の折りに供揃いに威儀を正して下知し乍ら通過致しました。

吉田家が蕎麦店として初めて暖簾を揚げた鮫洲は品川宿の本陣、(格式のある旅館で主として大名の泊る宿)や脇本陣がある、賑やかな宿の中心を少し離れた紅葉の名所、海晏寺の門前町で、当時は鮫洲や隣の彌師町は漁村で、品川浦は魚貝類も豊富で江戸城の御膳所にも献納の指定を受け、同時に江戸湾内各浦々の漁業の元締として漁撈の優先特権を持っていました。

江戸名産の一つとして浅草海苔が有名ですが、海苔の主産地は何と云っても品川浦でありました。「東海道名所記」を書いた浅井了意もその著書の中で品川海苔として名物なりと明記しているように風味絶佳の逸品で城中の御膳所にも献納の榮に浴しておりました、品川浦の海苔業者も今は海苔問屋の老舗として全国に販路を拡げ盛業を続けて居ります。

昔の吉田家前は街道に沿って松林が続き、春ともなれば汐干狩で賑はふ海辺より先に延び広げられた海苔の「ひび籠架」が波間に揺れているさまは正に品川浦景観の一つでありました。

街道を往来する旅人も遥かに房総の木更津や袖が浦に遠近する白帆を眺め乍ら暫し歩を留めて心を慰めたことと思ひます。

鈴が森の刑場は少し先にあつて歌舞伎十八番で御存知の幡随院長兵衛が白井権八との出合いの場所でもあります。此の刑場でお仕置になつた第一号は慶安四年(一六五一年)やむを得ぬ事情で

心ならずも由井正雪に二味一槍の名人、丸橋忠弥でありました。又、天和三年(一六八三年)には江戸の大火・振袖火事の八百屋お七も哀れ鈴が森刑場の露と消えております。戦後、区画整理に依り狭くなつた刑場跡も東京都の旧跡指定となつて供養塔や板碑の傍らに、はりつけ用の石や、火あぶり用の台石をそのまま残されて、昔の名残りをとめております。

旧東海道の北品川から大森に至る道筋には、それぞれ由緒ある神社、仏閣も多く、中には東海の七福神を祀る品川神社、荏原神社、浜川神社、磐井神社、及び海晏寺、品川寺、法禪寺、等の社寺は東海七福神めぐりで有名であります。

吉田家は大正元年に鮫洲から北濱川に移り現在に至つておりますが、此のあたり昔乍らの静かな雰囲気や今に保つてをり、庚申塔や道しるべに懐かしい時代の面影が偲ばれます。

北品川よりの旧東海道は幸い大正の大地震や昭和の戦火も免がれたため、諸々に、古きたすまひが残つておりますが、吉田家も昔日の面影を今に残すべく店構へにも心を盡し、古くからある数々の道具類も大切に保存して皆様の御覧に供してあります。

高橋泥舟・勝海舟とならんで幕末の「三っやう」と称されている山岡鉄舟を始め明治維新に活躍された人々からも御鼠屋に預かつておりました。私もは代々受け継いでまいりました伝統の味を守り、いつも新鮮な品々をとり揃えて皆様の御満足が戴けるようにと心を配り、お造り申し上げております。

何卒を今後とも一層の御愛顧を賜りますよう重ねて御願ひ申し上げます。

吉田家 主人 敬白

東海道品川宿



「東都名所 御殿山花見 品川全景」 歌川広重画

品川宿は、東海道五十三次の宿場の一つ。東海道の第一宿であり、中山道の板橋宿、甲州街道の内藤新宿、日光街道・奥州街道の千住宿と並んで江戸四宿と呼ばれた。

慶長6年(1601年)に中世以来の港町、品川湊の近くに設置され、北宿、南宿、新宿にわかれていた。場所は、現在の東京都品川区内で、京急本線の北品川駅から青物横丁駅周辺にかけて広がっていた。目黒川を境に、それより北が北品川、南が南品川とされた。

古典落語の廓噺(居残り佐平次、品川心中等)の舞台となっており、他の宿場がそうであったように岡場所(色町、遊廓、飯盛旅籠)としても賑わっていたことが覗かれる。

1772年、幕府は飯盛女の数を500人と定めたが実効性がないまま増加。1844年1月に道中奉行が摘発を行なった際には、1,348人の飯盛女を検挙している。その後も遊廓としての賑わいは、昭和33年(1958年)の売春防止法施行まで続いた。

東海道品川宿



「東海道品川御殿山の不二」
葛飾北斎『富嶽三十六景』より



「東海道五十三次の内 品川」
歌川広重画



途中参加の廣澤さんより頂いた
紹興酒で乾杯！



品川宿の旧東海道を和気あいあいと散策
しながら、中央を流れる目黒川の橋にて



旧東海道



旧東海道沿いにある品川寺



御殿山方向から品川宿を背景に

権八・小紫の比翼塚



目黒不動の仁王門のすぐそばにある権八・小紫の比翼塚



「恋合 端唄尽 小むらさき 権八」
三代歌川豊国画

鳥取池田藩士・平井正右衛門の嫡子だった平井権八(ごんぱち)は、父親の同僚を殺害して脱藩し、鳥取から江戸へと逃げてくる。殺害の原因は、父親が飼っていたイヌをけなされ家柄を侮蔑されたから・・・というものだったらしいが、剣の腕に自信があり血気さかんな権八には許せなかったのだろう。江戸へ逃亡してきた権八は、浅草の大川端あたりで辻斬りや強盗をつづけ、吉原へ通いながら遊女・小紫(こむらさき)と抜きさしならない深い仲になってしまった。しじゅう小紫に逢いたくなるため、権八は以前にも増して辻斬りや強盗を繰り返していく。

そのうち、目黒不動近くの東昌寺の僧・随川(ずいせん)と知りあい、寺内にかくまわれるようになってから(そのころには町奉行所の手配がまわり寺へと逃げこんだのだろう)、おそらく仏教の教義ともども熱心に諭されたらしく、権八は改心してそれまでの行状を深く反省している。住職から尺八を習い、虚無僧になって故郷の鳥取へ帰省するのだが、すでに父母は死去したあとだった。無常感をおぼえて観念したのか、権八はほどなく江戸へともどり奉行所へ自首している。

平井権八は1679年(延宝7)に鈴が森で処刑され、師事した随川和尚のいる東昌寺に葬られるのだが、ほどなく吉原を抜け出した小紫が、彼の墓前であと追い心中をしている。目黒不動前の比翼塚は、実際に起きた哀話にもとづきふたりのために、おそらくいずれかの芝居連の連中によって建立されたものと思われるが、いまでも香花が絶えないのは、4代目・鶴屋南北による『浮世柄比翼稲妻(うきよづか・ひよくのいなづま)』の1場面、「鈴が森」の人気の高いからだ。



白井権八と小紫の比翼塚にてお勉強です。

今回の勉強会に登場したお舟とお七と小紫の3人の女性を通して、女性の一途な思いの強さが伝わってきました。
この一途な思いを神仏に向ければ？



当日は目黒不動尊の縁日でした！

参加して頂いた皆さん大変お疲れさまでした！

ありがとうございました。